

【書評】

小倉和子著
『記憶と風景—間文化社会ケベックのエクリチュール—』
彩流社、2021年

OGURA Kazuko
Mémoire et paysage: Le Québec et ses écritures interculturelles
Sairyu-sha, 2021

羽生敦子
HANYU Atsuko

本書はケベック文学研究の第一人者であった小畑精和氏の『ケベック文学研究—フランス系カナダ文学の変容—』（御茶の水書房、2003年）に続く、ケベック文学の案内書、通覧書に位置するものであろう¹。小畑氏の研究から約20年、ケベック文学が内包する作品も変化している。フランコフォンやフランス語圏といった名称が日本においても定着しつつある中、フランス以外の土地のフランス語文学への関心も高まっている²。ケベック文学はまだまだ若い文学であるが、本書は移民文学や移動文学としても着実にその地位を築いていることを示す一冊である。

著者は現代フランス文学・フランス語圏文学を専門にする研究者である。近年は、ダニー・ラフェリエールへの関心が高く、2021年に逝去された立花英裕氏と並び、精力的に翻訳を行っている。彼の二度の来日にも尽力し、実際に「対面」したことは、『書くこと 生きること』の翻訳（藤原書店、2019年）にもつながり、本書でも、訳者としての立場を越え少し個人的な思いが作家へのまなざしとして表現される。また、ケベック大学モンリアル校のダニエル・シャルティエ氏との交流によって先住民文学、北方文学への造詣も深く、今後の研究成果が待たれる。

さて、本書は著者がこの十数年のあいだに発表してきたケベック文学に関する論考を編み直し「記憶」と「風景」というテーマで加筆したものであり、10章で構成されている。まず、それぞれの章で扱った作者と作品名を紹介する。

第1章 ケベック文学へのいざない

- 第2章 ガブリエル・ロワ『束の間の幸福』
- 第3章 アンヌ・エベール『王たちの墓』『激流』『木の部屋』『カムラスカ』
- 第4章 アンヌ・エベール『シロカツオドリ』
- 第5章 アキ・シマザキ『秘密の重圧』の五部作
- 第6章 ダニー・ラフェリエール『帰還の謎』
- 第7章 ダニー・ラフェリエール『甘い漂流』
- 第8章 イン・チェン『岸边は遠く』
- 第9章 ナオミ・フォンテーヌ『クエシパン、あなたへ』
- 第10章 ジョスリーヌ・ソシエ『鳥たちの雨』

冒頭で、小畑氏の著作の「続編」的な位置づけをしたが、本書においてもまず、はじめてケベック文学に触れる読者のために、「ケベック文学へのいざない」が用意されている。ジャック・カルチエに始まるケベックの歴史、英仏戦争に敗れ英系に支配されながらも文化（言葉）を死守し、カトリックの教えを守りながら森に生きる仏系の人々、20世紀の都市に生きる仏系労働者たち、そして1960年代の「静かな革命」、1977年の「フランス語憲章」、間文化主義への転換、つまり「フランス語」を核としたケベコワ社会への成立が説明される。第2章からはそれぞれの作家の描く場所（風景）と歴史、そして、その場所や歴史に翻弄される人々の内面の変化を綴った文学作品について論考が進められる。第5章から扱う作家は、小畑氏の著作では最終章（第六部）に置かれた「多様なアイデンティティのあり方」で紹介された作家と作品である。ここからが、本書を読む醍醐味であろう。アキ・シマザキのエクリチュールが差し出す日本の風景（第5章）、前述したラフェリエールの出生の地ハイチとデラシネの生活が始まったモンレアルの風景（第6章と第7章）、モンレアルと上海を越境し、夢想空間を描き出すイン・チェンの現在（第8章）、小畑氏の著作では研究の対象にすらなっていない先住民族文学（第9章）、最終章では、原点回帰するように、ジョスリーヌ・ソシエによるケベックの風景「森」をめぐる小説が紹介される。

まえがきの後には、ケベック州の地図が掲載されている。各章で描かれた場所（第5章と第8章以外）を読みながら確認できるのはテキストの「風景」を想像するために役立つ。以下、第4章、第5章、第6章、第7章、第9章について振り返ってみたい。

第4章で取り上げられる『シロカツオドリ』ではケベックの海景に焦点が当てられる。著者は「風景描写に注目した研究は決して多くない。しかし北

米の雄大な風景に慣れ親しんでいるわけではない筆者の目には、この作品に描かれた海鳥が舞う北国の海景は、峻厳なだけにいっそう魅力的でもある」(p.78)と言及し、作品における海景の価値について模索する。二人の少女の失踪と殺人という事件はガスベ半島突端に設定された架空の土地グリッフィン・クリークで起きた。ガスベ半島はジャック・カルチエがサンローラン河を遡上しフランス王の領土を告げる旗を立てた場所であり、ケベックの歴史を象徴する場所である。その栄光の歴史とは反対に、その風景は、灰色の空、白く静寂した砂州、木々がかたちづく黒い塊、シロカツオドリ頭の黄色だけがわずかに色を与えるだけの「きわめて色彩の乏しい世界」である。風景からも物語のサスペンス感が演出される。かつてエモンが描いた雪一面のケベックではない。しかし夏の終わりとはいえ8月のケベックの「涼しさ」が印象にのこる。一方で、現在、夏のガスベ半島では、ホエールウォッチング、バードウォッチングと快活なアクティビティが観光客のために展開されている。小説における風景の効果を改めて考えさせられる。

第5章が第4章までと異なるのは、移民によって書かれた文学が取り上げられている点である。すなわち、現在のケベック文学の特長ともいえる移民文学に話が切り変わる。シマザキ作品の「場」は日本である。筆者は「なぜ、シマザキはこのような過去の情景をフランス語読者に差し出すのだろうか」(p.119)と疑問を呈する。亡命移民ではない、むしろ自発的に日本から飛び出したシマザキがノスタルジックに日本を小説の場とすることは誰もが腑に落ちない点であろう。しかしながら著者は、フランス語で書くことにより、シマザキのエクリチュールはそれぞれの国の読者に多様な読み方が委ねられるものへと変化すること、場所(日本)は単なる風景となり、シマザキが差し出すのは、じつは人間社会のどこにでもありうる普遍的な主題であると論じる。シマザキは、アンヌ・エベールやアゴタ・クリストフからも影響を受けた作家であり、確かにテーマは日本の近代史ではない。フランス語で書くことによって、シマザキが主観的に描く日本は虚構化され、普遍的なテーマだけが浮かび上がる。シマザキの作品はこれまで、『椿』以外に邦訳はないが、邦訳すべきではない理由を筆者は暗示する。

第6章で取り上げられる『帰還の謎』はラフェリエールが33年ぶりに帰国したハイチの旅、第7章で取り上げられる『甘い漂流』はモンレアルに亡命後の1年間を描いた作品であり、二作は対をなす。まず、『帰還の謎』(2部)では、語り手はハイチの母親に父親の死を知らせるために33年ぶりに故郷に

帰る。旅の行程は、モンREALから父親が死亡したニューヨーク、ニューヨークからハイチの首都ポルトープランス、そして母の住むバラデールである。著者はこの旅の原形をホメロスの叙事詩オデュセイアだと推測し、共通点と相違点を検証する。共通点はホームに戻るまでの長旅である。オデュセイアの10年の旅に対し、ラフェリエールは33年とさらに長い。一方で前者の主人公はホームで家族との再会を果たすが、後者はホームでも「よそ者」という現実をつきつけられる。結局、ラフェリエールは父親というよりむしろ自分自身を知るための旅に出る（ルーツ・ツーリズムか?）。作品の構造からは、ラフェリエールが愛読する芭蕉の『奥の細道』の影響を示唆する。彼が携帯したガイドブックが、エメ・セゼールの『帰還のノート』であったことは、タイトルへと回収され、セゼールと父親へのオマージュに繋がると読む。ハイチの風景は「スラム街で生活する貧しい人たち、空き家になった豪邸の数々、空腹を抱えていてさえ他人のことを思いやる人々、そして100年後に訪れても変わっていないだろうと思える風景」(p.136)と世界から取り残された希望のないものばかりである。

第7章で取り上げられる『甘い漂流』ではラフェリエールと思われる話者が1976年にモンREALで過ごした最初の1年が綴られている。この章で、ケベックの提唱する間文化主義が、ハイチ移民からのインスピレーションを受けていたことが示される。ハイチ系知識人たちの文芸雑誌『漂流 (Dérive)』(1975-1987)が、1979年以降、「間文化主義的雑誌 (revue interculturelle)」を標榜したことが「間文化主義」の先駆けとなったようだ。著者はタイトル「漂流」もまた「旅人」ラフェリエールの意識と重なりと見る。形容詞「甘い (douce)」が添えられたとはいえ、モンREALにおけるデラシネの黒人への差別は酷い。「三〇余年後、モンREALの町を歩いていて知らぬ者がいないほどの人気作家となったラフェリエールにもこのような時期があったらと思うと、感慨深いものがある」(p.152)の言葉からは、ラフェリエールの人柄をも知る研究者だからこその感想であろう。

第9章で取り上げられる先住民族イヌー出身ナオミ・フォンテーヌが描く『クエシパン、あなたへ』へのケベックの読者の評価は高い。風景は先住民たちに特権と保護が付与された「居留地」である。「おわりに」で筆者が触れるのはケベック文学と先住民族文学、つまりマイノリティとの関係である。著者は「ここでは八十年代にケベックにおける移民文学のテーマだったが、二十一世紀の現在、先住民との関係を考えるうえでの重要なテーマとなっ

ている」(p.187)と言及し、その研究には社会学的なアプローチの必要性も説く。文学研究の新たな可能性を見据えている。

移民文学を標榜するケベック文学において風景、それぞれの土地のもつ記憶や人々の集団的な記憶はテキストの土台である。本書は、各章で作品のあらすじが丁寧に示されていることにより、学術的な内容にもかかわらず身構えずに通読できる一冊である。

注

- 1 真田桂子『トランスカルチュラルリズムと移動文学－多元社会ケベックの移民と文学－』（彩流社、2006年）や、山出裕子『ケベックの女性文学－ジェンダー・エクリチュール・エスニシティー』（彩流社、2009年）などもあるが、ケベック文学を通覧するものではない。
- 2 2018年に、ノーベル文学賞に代わるニュー・アカデミー文学賞をグアドルーブ出身の女性作家マリーズ・コンデが受賞したことも、日本におけるフランス語圏文学への関心を高める可能性があるだろう。

(はにゆう あつこ 立教大学観光研究所)